

薬剤性パーキンソニズム

英語名 : Drug-induced Parkinsonism

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

体内のドーパミンが不足して起きるパーキンソン病と同じ症状を示す「パーキンソニズム」は、医薬品によって引き起こされる場合もあります。

主に一部の胃腸薬^{いちようやく}や抗精神病薬^{こうせいしんびょうやく}などの医薬品でみられることがあるので、何らかのお薬を服用していて、次のような症状がみられた場合には、自己判断で服薬を中止したり放置したりせずに、医師・薬剤師に連絡してください。

「動作が遅くなった」、「声が小さくなった」、「表情が少なくなった」、
「歩き方がふらふらする」、「歩幅がせまくなった（小刻み歩行）」、
「一歩目が出ない」、「手が震^{ふる}える」、「止まれず走り出すことがある」、
「手足が固い」

1. ^{やくざいせい}薬剤性パーキンソニズムとは？

パーキンソン病^{*}と同じような症状を示す病態をパーキンソニズム（パーキンソン症候群）と呼び、そのうち、医薬品の副作用としてパーキンソン症状が現れるものを薬剤性パーキンソニズムといいます。

パーキンソン病とは、体内のドーパミンという物質が不足して起きる病気で、一部の胃腸薬や抗精神病薬などの中には、このドーパミンの作用を弱めるものがあり、パーキンソン病と同じ症状を引き起こすことがあります。また、パーキンソン病の方の症状を悪化させる場合もあります。

※パーキンソンという医師が発見したので、その名前が病名となっています。

2. 早期発見と早期対応のポイント

「動作が遅くなった」、「声が小さくなった」、「表情が少なくなった」、「歩き方がふらふらする」、「歩幅がせまくなった（小刻み歩行）」、「一歩目が出ない」、「手が震える」、「止まれず走り出すことがある」、「手足が固い」などの症状がみられた場合で、医薬品を服用している場合には、自己判断で服薬を中止したり放置したりせずに、医師・薬剤師に連絡してください。

この症状を比較的簡単に判定するために、患者さんの経過を観察する方法が、介護施設などで使用されています。この方法は、患者さん自身が自分で評価するためにも使われているものです。

以下の表は、パーキンソニズムに関係する評価項目を抜き出したもので、症状の程度で0点（全くない）、1点（ほとんどない）、2点（時々ある）、3点（良くある）、4点（頻繁にある）で評価し、合計点が6点を超えたら、薬剤性パーキンソニズムが疑われます。ただし、この表による評価は絶対的なものではないので、患者さん、または患者さんの家族の方が異常を感じた時には、医師・薬剤師に連

絡してください。

	0点	1点	2点	3点	4点
	全くない	ほとんどない	時々ある	よくある	頻繁にある
筋肉がつる					
筋肉が固い					
運動がゆっくりになった					
体の一部が勝手に動く					
揺れる感じがある					
落ち着きがない					
よだれが出る					

参考資料：「Liverpool University Neuroleptic Side-Effect Rating Scale (LUMSERS)」

※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することができます。

<http://www.info.pmda.go.jp/>

